周・田村・丁論文へのコメント

島村 恭則
SHIMAMURA Takanori

イタリアのヴィーコ（1668－1744）に発し、対啓蒙主義、対覇権主義の社会的文脈の中で、ドイツのヘルダー（1744－1803）、グリム兄弟（ヤーコプ・グリム（1785－1863）、ヴィルヘルム・グリム（1786－1859）の文献学と、ユストゥス・メーザー（1720－1794）の郷土社会研究とが合流することによって形成され、その後、世界各地に拡散し、それぞれの地で独自の発展を遂げたディシプリン―東アジアではこれを民俗学という、他ならぬわれわれのディシプリン―をめぐり、ヴィーコ『新しい学』（1725）から300年のいま、北京の地で、東アジア三国の民俗学理論を照合し、新たな時代コンテクストの中での理論のあり方を検討しようとするこの会議の開催をたいへんうれしく、またその将来へ向けてたいへん心強く感じております。

わたくしの任務は、周星先生、田村先生のご報告を中心に、コメントをすることであり、以下、20分ほど、お話させていただきます。

メディア、とりわけ現代のインターネットメディアをめぐる民俗学的研究は、2000年代に入ってアメリカ合衆国でさかんに行なわれるようになっております。ニューヨーク州立大学ポツダム校助教授のトレヴァー・ブランク（Trevor J. Blank）やウィスコンシン大学マディソン校教授のロバート・グレン・ハワード（Robert Glenn Howard）をはじめとする現在30代の民俗学者たちが積極的に取り組んでおり、すでにトレヴァー・ブランクの編で、*Folklore and the Internet: Vernacular Expression in a Digital World*［2009］や*Folk Culture in the Digital Age: The Emergent Dynamics of Human Interaction*［2012］などの論文集も刊行されています。あるいは、インターネットの民俗学を研究するにあたって、旧来のtraditionの概念の捉え直しが必要となり、同じくトレヴァー・ブランク編で、*Tradition in the Twenty-First Century: Locating the Role of the Past in the Present*［2013］も刊行されています。

これらの論文集は非常に興味深い論文を多く収載していますが、それらはいずれもインターネット上で生み出され、伝達されているテキスト（文字・図像・画像・動画）についての分析であり、物質としてのメディアや制度としてのメディアについての研究は行なわれていないということを指摘できます。先日、日本に滞在していたユタ州立大学の民俗学教授、リサ・ギャバート（Lisa Gabbert）さんと会話したとき、このことを話しましたところ、「たしかにそうだ。アメリカでは、スマートフォンの中身についてはたくさん研究があるが、スマートフォンそのものがどう使われるかは研究がない」とおっしゃっていたので、おそらくたしかなことだと思われます。

一方、本日のお二人のご報告では、テキストへの関心はもちろんおありでしょうけれども、そこに限定されずに、メディア自体が人びとによってどのように生きられているか、について、田

村先生は「広場ダンス」をめぐるエスノグラフィを披露され、また周先生も、関連するたくさんの事例を紹介されました。同様の問題関心がドイツにおいてどのようになっているかについては、本日、午後の李相賢先生のお話に期待するとしまして、少なくとも、東アジアの民俗学においては、テキストそのものに加え、メディアがどのように生きられているのか、という観点が明確に設定されているということになり、これは、世界の民俗学に対して、この場から発信してゆくべき重要な貢献であると考えます。より具体的にいえば、ここにトレヴァー・ブランクやロバート・グレン・ハワードたち、アメリカの民俗学者たちがいれば、われわれと彼らとの間でどのような議論のやりとりが行なわれ、その結果、この先どのように研究が深められてゆくことになるのか、という非常に興味深い問題点がここにあるということであります。この意味からも、ぜひ、いずれは東アジア三国とともに、アメリカ、ドイツ、世界各国の民俗学者を交えた世界民俗学のシンポジウムを行ないたいということをここで付言しておきたいと思います。

ところで、テキストであっても、メディアそのものであっても、これを民俗学が扱うというとき、民俗学における独自の視点、枠組みとはいかなるものか、この点について次に考えたいと思います。

2014年に日本で刊行しましたわたしの論文「フォークロア研究とは何か」（これは、現在、中国語・韓国語訳が進められており、『日常と文化』第4号に掲載の予定です）では、フォークロアを「フォークロア研究が対象把握のために設定する概念であり、『何らかのコンテクストを共有する人びと（folk）の間で生み出され、生きられた、経験（experience）・知識（knowledge）・表現（expression）で、ハイ・カルチャー（high culture）、エリート・カルチャー（elite culture）や、マス・カルチャー（mass culture）、ポピュラー・カルチャー（popular culture）とも関わりながら、それらとは概念上、区別されるもののこと」と定義しています。そして、フォークロアが有する性質について、「フォークロアは、ある特定のコンテクストの中で『生きられる』ことにより、非形式的（informal）、非公式的（unofficial）、非制度的（not-institutional）な性質を帯びたものとなっている」という補足的な説明を用意しています。

すなわち、フォークロアの中には、もともとそのようなもの、つまり非形式的（informal）、非公式的（unofficial）、非制度的（not-institutional）なものとして生み出され、生きられているものもあれば、「形式性（formality）、公式性（officiality）、専門性（speciality）によって特徴づけられる制度（institution）、組織（organization）、知識（knowledge）、表現（expression）、表象（representation）、およびそれらの総体としてのシステム（system）」が、何らかのコンテクストを共有する人びとの間で「生きられる」ことにより、非形式的（informal）、非公式的（unofficial）、非制度的（not-institutional）な性質を帯びたもの、すなわちフォークロアとなるものもある、という説明です。

以上のような定義、説明を用意しますと、まず、テキスト＝表現文化（expressive culture）のみならず、さまざまな生きられた経験、知識を扱うことができるようになります（ちなみに、トレヴァー・ブランクは、フォークロアを、創造性の外に向けられた表現（outward expression of creativity）と定義しています。わたしの場合は、expressionのほかに、experienceとknowledgeを加えているわけです）。また、本日、午後に報告される、丁秀珍先生の発表原稿の冒頭で、バウジンガーを引きながら述べられている「今日、『民俗』と称されるものは、メディアあるいは公的な実践システムの副産物」だというご指摘も、「生きられることでフォークロアとなる」という論点に吸収できることになります。

そしてもう一つ、わたしは2014年の日本民俗学会年会で「ヴァナキュラー・トラディション・

通時的リフレクション―フォークロア研究の理論（1）―」という報告を行ない、フォークロアとヴァナキュラーとの関係について規定を行なっておきました。ここでいうヴァナキュラーという概念が、本日の議論の内容と大きく関わりますので、これについても少し説明させていただきます。

ラテン語で「奴隷の言葉」を意味したヴァナキュラーは、一般には「ローカルな」の意味で用いられている言葉ですが、近年、この言葉がアメリカ民俗学でさかんに用いられるようになっています。その使用法は、「フォークロア」の語の単なる言い替えの場合もありますが、より特徴的な用法として、「既存の権力に対する批判性を持った文化的特徴」といった意味で用いられていることも少なくありません。たとえば、ロジャー・エイブラハムズ（Roger D. Abrahams）は、つぎのように述べています。

> 民俗学者が研究すべきことは、人間の行為である。それは、最も集団的な場面における人間の創造的で、ヴァナキュラーな反応から生まれる。それは我々を無能にしようとする力に対して反応する手段である。ヴァナキュラーな無作為さや騒々しさこそ主題の中心である。人は現在を語ろうとする時、過去の慣習を参照することによって互いに交渉する。民俗文化は、支配的な政治イデオロギーが〈フォルク〉やコモンマンから引き出される場合でさえ、公式文化の構築とあらゆるレベルで対照をなす。パロディ、風刺、カーニバレスクの動機が文化生産に関わる度に、その内部や外部にヴァナキュラーの活力が現われる。抵抗運動が抑圧的政治体制を意のままにした場合、精神の維持に関わるのは、政治的、社会的ユーモアである。それだけではない。ヴァナキュラリティは保全論者（コンサヴェイショニスト）的空気にも潜在する。つまり消費に対抗して、リサイクル、改編、改装、修復、復元、注文製造、そして大量生産物や環境への人間性の付与を特に重視する。［Abrahams 1993:5-6］

そして、ロバート・グレン・ハワードも、ヴァナキュラーをこのような含意で用い、フォークロアがインターネット上に展開している様相を、ヴァナキュラー・ウェブと称しています。彼の博士論文は、インターネット上で展開したゲイ・カトリシズムの言説をフォークロアとして研究したもの（*Digital Jesus: The Making of a New Christian Fundamentalist Community on the Internet*として2011年に著書として刊行されています）ですが、それによると、オーソリティ（authority）としての「制度的、公式的なキリスト教」に対する、新キリスト教根本主義（New Christian Fundamentalism）やゲイ・カトリシズム（Gay Catholicism）などの「非制度的、非公式的なキリスト教」を自らの信仰とする人びとが、インターネット上で、ヴァナキュラー・ウェブを構成していったが、その過程で、彼らの言説は、一定のpowerを持つようになった。その状態はヴァナキュラー・オーソリティという概念で説明されるものだが、このヴァナキュラーなものが、力を獲得してオーソリティにまで高められたとき、すなわち、ヴァナキュラー・オーソリティとなったとき、それは、ヴァナキュラーに対立する側のオーソリティとは別のオーソリティとして、社会的な力を獲得することになる、と指摘しています。

ハワードの理論は、さまざまな事例の説明にも応用可能なようです。たとえば、2014年の香港のアンブレラ・レボリューション＝雨傘革命も、当初、デモ隊の学生たちが公安が吹きかけてくる催涙ガスを避けようとして、たまたま持っていた雨傘を開いたわけですが、これが動画に撮られインターネット上で流通すると、いつしかこれが雨傘革命、アンブレラ・レボリューションとして命名され、雨傘がデモのシンボルとなる。すると、現実の路上にいるデモ隊は、それに対応

してシンボルとしての雨傘、色も黄色に絞り込まれてくる、を開いて路上占拠をするようになる。そして、その開き方、雨傘の設置の仕方も、アーティスティック＝芸術的になってくる。また、ネット上では、雨傘革命の歌もつくられ流通する。世界のマスコミは一連の動きをマスメディアにのせて報道し、世界の人びとは、これをアンブレラ・レボリューションとして認知する。このように、ネットを介して、デモにまつわるさまざまな表現文化＝フォークロアの一種、が生み出され、それが路上に還流して現実のデモの構成要素となり、さらにまたそれがさまざまなメディアを通じて世界へ伝えられ、人びとから認知される。このようなプロセスは、ヴァナキュラーな表現文化が、ヴァナキュラー・オーソリティへと成長していったプロセスとして捉えることができるでしょう。

日本でも、インターネットを介したヴァナキュラー・オーソリティの生成を確認できます。日本では、保育園の待機児童問題が深刻になっています。働く母親たちが、幼児を保育園に預けたいのですが、保育園の受け入れキャパシティがいっぱいになっていて、預けたくても預けられず、結果的に社会に出て働くことができない状況に置かれているということが少なくありません。このことを、待機児童問題というのですが、これに業を煮やしたある人が、ネット上で、「保育園落ちた死ね！！！」という投稿をしました。

> 何なんだよ日本。一億総活躍社会じゃねーのかよ。昨日見事に保育園落ちたわ。どうすんだよ私活躍出来ねーじゃねーか。子供を産んで子育てして社会に出て働いて税金納めてやるって言ってるのに日本は何が不満なんだ？　何が少子化だよクソ。子供産んだはいいけど希望通りに保育園に預けるのほぼ無理だからw って言ってて子供産むやつなんかいねーよ。不倫してもいいし賄賂受け取るのもどうでもいいから保育園増やせよ。オリンピックで何百億円無駄に使ってんだよ。エンブレムとかどうでもいいから保育園作れよ。
>
> 有名なデザイナーに払う金あるなら保育園作れよ。どうすんだよ会社やめなくちゃならねーだろ。ふざけんな日本。保育園増やせないなら児童手当20万にしろよ。保育園も増やせないし児童手当も数千円しか払えないけど少子化なんとかしたいんだよねーってそんなムシのいい話あるかよボケ。国が子供産ませないでどうすんだよ。金があれば子供産むってやつがゴマンといるんだから取り敢えず金出すか子供にかかる費用全てを無償にしろよ。不倫したり賄賂受け取ったりウチワ作ってるやつ見繕って国会議員を半分位クビにすりゃ財源作れるだろ。まじいい加減にしろ日本。（http://anond.hatelabo.jp/20160215171759　2017年2月16日アクセス）

この内容は、たいへん微妙で巧みな言葉遣い（いわゆる「乱暴な言葉」を効果的に用いています）とリズム感からなる詩的表現といってよいものでしたが、これがネット上で拡散され、多くの共鳴者が登場します。そして、国会でもこのことが取り上げられたのですが、安倍首相は、「匿名である以上、実際、本当に起こっているか確認しようがない」という頓珍漢な答弁をし、各方面から呆れられるという事態も生じました。これに対して、ネット上での拡散はさらに続き、またこれをマスコミが取り上げ、さらにリアルな世界では、国会前に「保育園落ちたの私だ！」というプラカードを持った人びとが集まって抗議行動をしたり、というように事態がさまざまなかたちで展開し、結局、安倍首相は、「保育士の待遇改善など、待機児童問題改善への意欲を示す」ということになりました。これなども、ヴァナキュラーな表現がオーソリティを獲得し、つまりヴァナキュラー・オーソリティとなって、政権というオーソリティに一定の影響を及ぼした、と分析することができると思います。

ところで、このように興味深い分析が可能となるヴァナキュラーという概念ですが、ハワードらの研究では、ヴァナキュラーとフォークロアとの関係については、明確な説明がなされていないようです。そこで、わたしは、ハワードによるヴァナキュラーの捉え方を引き継ぎつつ、ヴァナキュラーとフォークロアとの関係をつぎのように考えました。

すなわち、「ヴァナキュラーとはフォークロアが持つ性質の一面をあらわすもので、オーソリティ（authority）によるコントロールが難しい、もしくは不可能な創造性を有している状態のことをさす。そして、これが一定のオーソリティを獲得したとき、そのヴァナキュラーは、ヴァナキュラー・オーソリティとして概念化される。その場合、ヴァナキュラー・オーソリティは、既存のオーソリティに一定の影響を及ぼしたり、既存のオーソリティに取って替わったりする可能性があるかもしれないし、またないかもしれない。なお、すべてのフォークロアがヴァナキュラーとして存在しているわけではなく、フォークロアのうちのあるものが、ヴァナキュラーとして把握されるものである」という説明であります。

このように考えるとき、さきに取り上げたエイブラハムズによるヴァナキュラーについての発言への理解が深まることとなり、また、このあとの丁先生の発表論文にある「バーチャルな世界を通して現実を変化させ再び専有する方法」、「支配の論理の裏側、あるいはその内側から普通の人びとが論理を専有、再専有しながら生きていく暮らしの様式、さらには多様、多彩な暮らしの知恵」のフォークロアとしての把握が可能になるものと考えます。ただ、その場合、ある現象をヴァナキュラーと名指しするだけでは、それは単なるレッテル貼りと、それによる対象の神秘化をはかっているにすぎないのであり、前提として重要なことは、やはり丁論文にあるように、「依然として執拗に日常を支配している資本主義の具体的なメカニズム」への注目、「現実世界とバーチャルな世界を統合しながらそのメカニズムを作動する様相」の「入念な観察、解明」という作業であるということを確認しておきたいと思います。

以上をもちまして、わたくしのコメントとさせていただきます。

参考文献

Abrahams, Roger D., 1993, “Phantoms of Romantic Nationalism in Folkloristics”, *The Journal of American Folklore*, Vol.106, No.419:3-37.（エイブラハムズ, ロジャー・D.（2012）「民俗学におけるロマン主義ナショナリズムの幻影」『アメリカ民俗学―歴史と方法の批判的考察―』小長谷英代・平山美雪編訳、東京：岩田書院、19-75）

Blank, Trevor J. ed., 2009, *Folklore and the Internet: Vernacular Expression in a Digital World*, Logan: Utah State University Press.

Blank, Trevor J. ed. 2012, *Folk Culture in the Digital Age: The Emergent Dynamics of Human Interaction*, Logan: Utah State University Press.

Blank, Trevor J. and Robert Glenn Howard eds. 2013, *Tradition in the Twenty-First Century: Locating the Role of the Past in the Present*, Logan: Utah State University Press.

Howard, Robert Glenn, 2008, “The Vernacular Web of Participatory Media,” *Critical Studies in Media Communication*, 25（5）：490-513.

Howard, Robert Glenn, 2011, *Digital Jesus: The Making of a New Christian Fundamentalist Community on the Internet*, New York: New York University Press.

Howard, Robert Glenn, 2013, “Vernacular Authority: Critically Engaging ‘Tradition’”, Trevor J. Blank and Robert Glenn Howard eds., *Tradition in the Twenty-First Century: Locating the Role of the Past in the Present*, 72-99. Logan: Utah State University Press.

島村恭則 2014「フォークロア研究とは何か」『日本民俗学』278:1-34